



更科日記

上



第五卷
共貳冊
龜井家藏書

西門蘭溪校

更科日記

東都書肆

千鍾房
萬笈堂
梓
金花堂

凡例

一此書元錄十七年板ノ半帙本ヲ正本ニシテ塙本古寫本
一テ校合セシク但京へ上ルマテノ処ハ錯乱多クシテヨミカタ
ケレバ今カキ改メタリコハ吳臨川カ書經ノ洪範ヲ改正セン
例ニヨレル



閑田次筆云更科日記下総ノ國トムサシノ堺ニアルフ
ト井川ト云々又ムサシトサカミトノ中ニアルアスタ川ト
云ハ在五中将ノ言問ハントヨミケルワタリト云々此段
タイフカシク思テ契冲師加茂氏モ勢語ノ注ニ論シ
タリ此頃千蔭ノ文ニ古本ハムサシト下総ノ間アスタ

凡例

川トアリ又ムサシサカミノ間ナルフト井川トミユ今ノ馬
入川也ヘシ或人今ノ川筋ニハアラテモト隅田川ト云
アリト云ハカヘリテタシカナラヌトカケリ我モカ子テ
疑アリテ錯乱ヲ云シオキタリシ人々其心シテミ玉ハカシ
一此作者ハ管廟六世ノ孫右中弁管原孝標ノ女ニ
テ信濃守橘俊通ニ嫁シテ肥後守仲俊ヲ生リ初ハ
祐子内親王家ノ女房タリシ之撰集ニモヨミ哥ヲ出シテ
新古今ヨリ新拾遺マテ十四首入タリ又兄アリテ和
泉守定義ト云紀傳ノ道ヲ業トシ令聞祖ニ恥サル
人ニテ京北野本殿七坐ノ内ノ和泉殿ト云ハ此人ニ

ト云ハ

一更科日記ト名付シトハ此作者ノ夫俊通天喜五年
信濃守トナリテ任國ニ赴キ其後康平元年歸京ノ
後アル夜甥ノ來リシカハ「月モ出テ闇ニクレタル姨捨ニ何
トテコヨヒ尋キツラントヨノリ且卷中月ヲ忌シク哀トミシ
哥數首アリ是ラニヨリテ更科ノ名ハオホセツラン

天保甲午夏

西門蘭溪誌

元本二冊中
入格を以て
ひまを以て
のひまを

元本一冊
より見ても
あつた
を言所り
後より見
る
とあるの
の原の字
を

あゆむは十月つりり好るよ、
玉葉
何れもあはれなきあはれり
あつて知られぬ(二)二村の山
材取木のりやみ度とほつり
かきう能落のりやみ度とほつり
一と橋のりよもぬく何の足
尾張の國なる昭海の海を
くた有霜かんのちつけん
とあるはりまうたどひ色
まゝの心後しつて

十

どの世もそむをそむて
て、
無もわつて不破の
きあつたのりよもぬく
捧めするむる時
らばい
かむ
う
あ
ま

十

よき事なるをばしめしむるは
かゝるにこそよき事なるをばしめしむるは
かゝるにこそよき事なるをばしめしむるは
かゝるにこそよき事なるをばしめしむるは
かゝるにこそよき事なるをばしめしむるは
かゝるにこそよき事なるをばしめしむるは
かゝるにこそよき事なるをばしめしむるは
かゝるにこそよき事なるをばしめしむるは
かゝるにこそよき事なるをばしめしむるは
かゝるにこそよき事なるをばしめしむるは

増本あれ
もつたは
ゆりて
かゝるに
かゝるに
かゝるに

よき事なるをばしめしむるは
かゝるにこそよき事なるをばしめしむるは
かゝるにこそよき事なるをばしめしむるは
かゝるにこそよき事なるをばしめしむるは
かゝるにこそよき事なるをばしめしむるは
かゝるにこそよき事なるをばしめしむるは
かゝるにこそよき事なるをばしめしむるは
かゝるにこそよき事なるをばしめしむるは
かゝるにこそよき事なるをばしめしむるは
かゝるにこそよき事なるをばしめしむるは

増本写本ハ
思ヒシ
下向ヲ切リ

増本

ほろやのりきごうに新目社おのふらたうの移りの梅
年しうのりきごうに新目社おのふらたうの移りの梅
年しうのりきごうに新目社おのふらたうの移りの梅
年しうのりきごうに新目社おのふらたうの移りの梅
年しうのりきごうに新目社おのふらたうの移りの梅
年しうのりきごうに新目社おのふらたうの移りの梅
年しうのりきごうに新目社おのふらたうの移りの梅
年しうのりきごうに新目社おのふらたうの移りの梅
年しうのりきごうに新目社おのふらたうの移りの梅
年しうのりきごうに新目社おのふらたうの移りの梅

瑞写本老保
氏の上の
ありやのた
つてり

あへりめけりてらむもなりや
むのりきごうに新目社おのふらたうの移りの梅
年しうのりきごうに新目社おのふらたうの移りの梅
年しうのりきごうに新目社おのふらたうの移りの梅
年しうのりきごうに新目社おのふらたうの移りの梅
年しうのりきごうに新目社おのふらたうの移りの梅
年しうのりきごうに新目社おのふらたうの移りの梅
年しうのりきごうに新目社おのふらたうの移りの梅
年しうのりきごうに新目社おのふらたうの移りの梅
年しうのりきごうに新目社おのふらたうの移りの梅
年しうのりきごうに新目社おのふらたうの移りの梅

稿本此注あり
下あのみあ

いそる大船の字法はかゝるも意終らぬも亦此世
あり、これらもあやまると物まゝにさすもさうか
いふはつゝさく人のやうな人も秘人ぞれはるの
ふり此世の人を十七、八よりいへば、鍾よりいへば、
とれらるゝあやまひのさすもさくは、かゝるにさすあひする
こゝにいふかやむとたむ、稿本
まみり、あやまひのほ氏をいふかやむかあをせんと
まみり、あやまひのほ氏をいふかやむかあをせんと
舟に女来のあやまひのほ氏をいふかやむかあをせんと
のみち月をいふかやむかあをせんと

稿本此注あり
長元五年二
月八日任常
陸六十六
子廿五

いそる大船の字法はかゝるも意終らぬも亦此世
あり、これらもあやまると物まゝにさすもさうか
いふはつゝさく人のやうな人も秘人ぞれはるの
ふり此世の人を十七、八よりいへば、鍾よりいへば、
とれらるゝあやまひのさすもさくは、かゝるにさすあひする
こゝにいふかやむとたむ、稿本
まみり、あやまひのほ氏をいふかやむかあをせんと
まみり、あやまひのほ氏をいふかやむかあをせんと
舟に女来のあやまひのほ氏をいふかやむかあをせんと
のみち月をいふかやむかあをせんと

いづれにぬらうきもあまひも神さかしのくし神性乃
しよふいづれにぬらうきもあまひも神さかしのくし神性乃
うたひのまはしりぞきたまふものおまうし鏡をひき
さめぬべし増本写本ひきめやそひひかきとひひあつて
かこまりてふもさかすかきここの鏡をたん
きさうつせとゆりしとあつてきさうつせはや
まろるしゆれかみそふべきゆめをそふばかみをあか
たみうたひさかのけをよふられ増本たひきれはうか
しき増本たひきれはうかたひきれはうかたひきれはうか
ろびなきもあまひもあまひもあまひもあまひもあまひも

いづれにぬらうきもあまひも神さかしのくし神性乃
しよふいづれにぬらうきもあまひも神さかしのくし神性乃
うたひのまはしりぞきたまふものおまうし鏡をひき
さめぬべし増本ひきめやそひひかきとひひあつて
かこまりてふもさかすかきここの鏡をたん
きさうつせとゆりしとあつてきさうつせはや
まろるしゆれかみそふべきゆめをそふばかみをあか
たみうたひさかのけをよふられ増本たひきれはうか
しき増本たひきれはうかたひきれはうかたひきれはうか
ろびなきもあまひもあまひもあまひもあまひもあまひも
いづれにぬらうきもあまひも神さかしのくし神性乃
しよふいづれにぬらうきもあまひも神さかしのくし神性乃
うたひのまはしりぞきたまふものおまうし鏡をひき
さめぬべし増本ひきめやそひひかきとひひあつて
かこまりてふもさかすかきここの鏡をたん
きさうつせとゆりしとあつてきさうつせはや
まろるしゆれかみそふべきゆめをそふばかみをあか
たみうたひさかのけをよふられ増本たひきれはうか
しき増本たひきれはうかたひきれはうかたひきれはうか
ろびなきもあまひもあまひもあまひもあまひもあまひも

